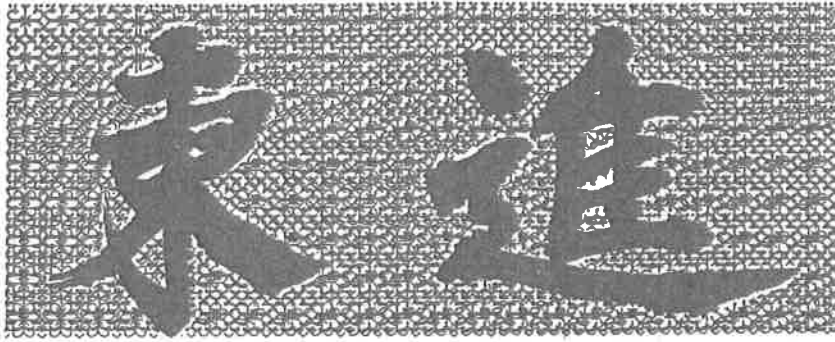


第5号

平成5年
4月1日

題字
植木 満会長



発行所

土浦一高東進会

〔茨城県立土浦一高〕
進修同窓会
東京支部

事務局 〒101 東京都千代田区神田神保町2-14 朝日神保町プラザ801号
千代田法律会計事務所内 ☎ 03-3262-0310 FAX 03-3262-0648

東進会の本年度総会・懇親会は6月12日(土)正午から東京プリンスホテルで!



建設業労働災害防止協会「建設の安全」'93.4月号表紙に載った土浦一高本館(4頁に関連記事)

年度別国公立大学合格者数(実数)

()は現役合格者数

卒業年	卒業回	卒業者数	国公立	国立	東京大	京都大	東北大	茨城大	筑波大	参 考	
										早稲田	慶 應
54	31	357	205 (147)	195 (143)	3 (2)	2 (1)	13 (12)	60 (44)	42 (36)	48 (27)	31 (19)
55	32	361	161 (107)	155 (105)	5 (3)	1 (0)	7 (5)	52 (31)	39 (31)	44 (24)	12 (6)
56	33	397	190 (134)	179 (127)	5 (2)	3 (0)	16 (10)	54 (41)	40 (32)	64 (28)	22 (8)
57	34	407	229 (165)	209 (153)	8 (4)	4 (2)	22 (18)	68 (53)	39 (30)	47 (19)	34 (19)
58	35	402	212 (139)	202 (133)	9 (5)	4 (1)	11 (8)	68 (46)	37 (29)	69 (25)	26 (6)
59	36	400	224 (155)	213 (150)	8 (4)	3 (1)	21 (16)	61 (40)	43 (31)	52 (25)	24 (15)
60	37	398	205 (131)	194 (125)	7 (2)	3 (2)	21 (15)	56 (41)	38 (30)	51 (17)	26 (9)
61	38	416	270 (165)	260 (160)	10 (4)	2 (1)	25 (14)	69 (50)	58 (42)	69 (28)	42 (20)
62	39	421	232 (153)	229 (150)	12 (9)	7 (2)	17 (9)	36 (27)	51 (42)	49 (16)	22 (13)
63	40	421	250 (166)	237 (159)	20 (15)	13 (10)	21 (14)	29 (25)	45 (34)	61 (33)	33 (13)
平元	41	416	268 (173)	259 (169)	21 (13)	6 (3)	12 (5)	24 (16)	54 (43)	61 (22)	24 (10)
2	42	420	242 (164)	232 (160)	25 (19)	7 (5)	25 (15)	38 (29)	41 (34)	49 (31)	23 (10)
3	43	420	278 (197)	266 (188)	27 (20)	5 (2)	28 (17)	36 (31)	59 (51)	58 (41)	46 (26)
4	44	466	248 (177)	239 (171)	22 (17)	4 (1)	18 (15)	18 (15)	52 (45)	71 (41)	53 (27)
5	45	416	233 (141)	221 (135)	22 (11)	4 (2)	24 (14)	21 (14)	48 (41)	71 (35)	38 (19)

東大二二名、早大七一一名、去年と同数
 第二の団塊の世代のピークを越えた
 今年の大学入試は、別表のとおり、ほ
 ぼ昨年と同様の結果であった。東大は、
 国公立合格者がピークの二七八名(内
 現役一九七名)を記録した平成三年の
 二七名(内現役二〇名)、平成二年の
 二五名(内現役一九名)に次ぐ史上三
 位の二二名で昨年と同数である。ただ
 し、現役は昨年が一七名だったのに対
 し、二一名で、結局受験者のピークを迎

えた一、二年前のしわ寄せが今年の結
 果となったものであろう。
 過去五年間の平均、現役一五名、浪人
 六名の比率から見ても今年は今現役にとっ
 ては苦しい年であった。
 同じことは、昨年史上最高の七一名
 (内現役四一名)の合格者を出した早
 大も、今年と同じ七一名中現役は三五
 名で若干少なくなっている。
 なお、地元筑波大の四八名中現役四
 一名は、過去五年間の平均と実数、比
 率ともほぼ同じである。

一高出の女子東大生 ガンバる
 つくばマラソンで優勝



(読売新聞より)

昨年行なわれた第二回つくばマラ
 ソンで、昨春土浦一高を卒業し東大文
 Iに入学した大西まり子さんが二時間
 五六分三九秒の好タイムで優勝した。
 東大入学後陸上部に入って本格的に長
 距離を始めたばかりの快挙で、自分で
 も信じられなかったという。
 司法試験を目指しているというが、
 この集中力と持久力があれば、合格間
 違いなし。因に、お父さんは筑波大学
 体育科学系の中堅教授で、永く日本ハ
 ンドボール協会の技術指導担当の常務
 理事をして将来を嘱望されている。

今でも土浦、そしてこの先も土浦

(昭和三十六年卒 菊田佳幸)

生まれも育ちも土浦は、一高のある

真鍋”、そして現在も土浦に住み、
 はや今年でちょうど五〇の歳を迎える
 ことになる。単なるサラリーマンで、
 勤務地が東京、しかも後継ぎでもない
 のになぜあんな田舎の土浦に住み遠方
 から通うのかと、今でもよく人から言
 われる。三〇歳頃までは、「いや、こ
 の年になってもまだ乳離れ出来なくて
 ね・・・」などと答えていたが(実際
 はそうだった?)、実は土浦が本当に
 好きだからである。こういうと、いか
 にも島国根性の田舎モンといわれそう
 だが、余計なお世話だ、田舎者で結構
 ここまで来たなら何も怖いものはない
 (歳のことである)、好き以上はない。
 土浦はイイのだ! 地元の友達もイッパ
 イいる。霞ヶ浦・桜川そして紫峰筑波
 山が見える、まさに土浦一高の校歌そ
 のものだ。絶対永住だ! 数年前には墓
 地も買った・・・
 と、いささかのぼせたが、こんなわ
 けですでに二八年、毎日土浦から秋葉
 原まで”痛動”している。
 さて、このような私を進修同窓会東
 京支部に誘って下さったのは、ともに
 同級生で副支部長の土金さんと支部幹
 事の関山さんのお二人である。平成二
 年度の総会より参加させていただいて
 いるが、毎回たくさんの先輩・後輩の
 方々にお会いでき、大変楽しみにして
 いる。お二人には勿論のこと、植木支
 部長をはじめ、運営役員の皆様に感謝
 するとともに、誠に微力ではあるが、
 地元土浦と会員皆様との橋渡し役とし
 てお役に立ちたいと考える。

オリンピックは四年に一度世界中が注目するも文字通りの祭典である。しかし、裏方である取材人は日本との時差言葉、不慣れな土地、少ない人数でも期待される最善の取材など、ハードな仕事強いられる。

92年バルセロナ五輪は、スペインの青い空から降り注ぐ強い日差しが、一ヶ月の真剣勝負に拍車をかけていた。

日本選手団の団長としてバルセロナ入りした古賀稔彦は、ソウル五輪で金メダル確実といわれながら不覚を喫し、四年後にかけてきた柔道家である。

「平成の三四郎」。心技ともに充実感をみながら彼は、五輪前の皮算用では、数少ない金メダルを手にする一人であろうといわれた。

思いもよらぬ、そして振り返ってみると日本人にとってバルセロナ五輪最大ともいえるドラマティックなでき事は、五輪村入りの翌日、報道陣の公開練習中におこった。

日本男子柔道の練習は、放送センターから歩いて五分程のとある建物の二階の緑色のマットが敷かれた合気道場で行なわれた。前年に行なわれた世界選手権の際にも調整場所として使用されたところであったが、はっきり言って私の感想は「こんなところで・・・。」というところである。日本の御家芸である柔道だけに、普段、広い畳敷きの練習場で思い切り汗を流している彼ら日本代表の選手達が、緑色のマットの上に水をまいてすべり対策をしながらの最終調整である。選手達の戦う相手

は、決して競技場の他国選手だけでは無かったのである。

岡田選手のかけ声でウォーミングアップが始まる中、古賀選手は部屋の片隅で念入りに左膝のテーピングを行っていた。彼が膝の靭帯をいためていることをわたしはスポーツ部の柔道担当の人に教えられた。一流選手というのはどこかに傷を抱えているものだ。

一通りの練習風景の撮影を終え、わ

古賀が勝った！ バルセロナ五輪を取材して

フジテレビ 柴崎 敦子 (昭55卒)



柴崎敦子さんは筑波大を卒業してフジテレビに入社。編成局第3製作部に所属して、レギュラー番組「THE WEEK」のディレクターとして活躍中。当会の学年幹事として総会にも毎回出席して突撃インタビューを行っている。(写真前列向かって左端)

れわれは女子の練習場へと移動した。取材車に乗って小一時間かかるその体育館は本格的な柔道用体育館であった。しかし女子柔道選手たちは列車に乗ってやってきたという。

便は利いが手狭の男子練習場と、広いが不便な場所にある女子の練習場。調整のみとはいえ、大舞台を前に練習場の苦労は、プレッシャーのかかる彼等には本当に気の毒であった。「古賀

選手がけがをしづらい。」
我々は即座に放送センターに戻り、たまたまフジテレビのカメラマンだけがVTRに納めた決定的な瞬間を再生した。

吉田との乱取り。ふんばって足が滑る。古賀の叫び声。駆け寄るコーチ陣。

ぼおせんど苦しむ古賀を見詰める吉田。その後の古賀は徹底的に選手村での「闘病生活」に入った。彼を見守っていたスポーツマッサーのトレーナーによれば、西洋医学、東洋医学、ありとあらゆる治療が施されたという。数日後、あのけがをした練習場に姿

をあらわした彼は、他選手の熱のこもった調整を見詰めるだけであった。もはや彼の目は「平成の三四郎」のそれではなく彼のメダルの夢もこれまでかと思われた。

上村春樹監督は、取材陣の質問に、「勘弁してやって下さい。ごらんの通りです。」と、落胆を隠せなかった。

71キロ級の試合当日、会場入りする古賀の足は残念ながら激しく引きずられていた。報道陣にも、彼に声をかけるのはやめようと、暗黙の了解が成り立っていた。あまりにも気の毒であったからだ。その日の朝まで、コーチ陣が出場を見あわせようかと話していたそうである。

しかし、古賀は勝った！バルセロナ入りしたときの「平成の三四郎」の短期間の怪我との戦いは、多分にカーテンのかけに隠されていたものの、日々の彼の表情が雄弁に物語っていたと思う。

私にとって五輪取材は、ソウルに続き二度目であった。ヒロインが生れることもあればメダルの重圧に数々の名選手が泣くこともある。

選手の晴れの舞台もさることながら、勝っても負けてもその裏の壮絶なドラマが、五輪取材の醍醐味である。これだから、オリンピックはやめられない！

東進会のサークル活動に参加を！

東進会は、総会のみではなく、各種のスポーツ、文化活動も活発にやろうという方針を掲げています。

今年度は、東進会の名簿を作ることになっていくのを機会に、サークル活動のアンケートを取っています。

同封の返信ハガキにて、ぜひご回答下さい。

第一回ゴルフコンペ開催

昨年一月二六日学年幹事を中心としたゴルフコンペを八郷町の東筑波カントリークラブで開催しました。

植木満会長も参加する予定でしたが都合が悪く参加できませんでした。参加者一〇名、おだやかな晩秋の一日を、歓声をあげながら、思う存分楽しみました。

東筑波カントリーは非常に距離のあるコースですが、成績は、近藤久也会員（昭和二十七年卒）がグロス九六、ネット七六で優勝、矢口照雄幹事（昭和三七年卒）がグロス八八、ネット七八で準優勝、三位は土金雅晴副会長（昭和三十六年卒）でした。プービー賞は、遅刻してきた酒井学雄幹事（昭和五六年卒）が獲得しました。その他の参加者は、昭和三十一年卒の坂本善之副会長、田村恒、大野金一幹事、紅一点の土方登志子幹事（昭和三二年卒）、幕内邦夫幹事（昭和四三年卒）、鈴木良治幹事（昭和四五年卒）でした。



坂本 幕内 大野 鈴木 土金 矢口 近藤 土方 田村

本館（重文）設計者の親族が

土浦一高を訪問

（四月一〇日付朝日新聞より）

国の重要文化財として知られる土浦市真鍋四丁目の旧制土浦中学（現土浦一高）本館。その設計者、故駒杵勤治さんを義父とする幸子さん（八一）が九日、広島県安芸郡府中町から土浦一高を訪ねてきた。幸子さんは「義父の建物を見るのが長年の夢でした。これで親孝行ができました」と感激した様子でした。

旧制土浦中学本館は一九〇四年末に完成。ゴシック様式を基調とした木造平家建てスレートぶき。玄関の三連尖頭（せんとう）アーチや左右の尖頭、屋根窓などが寺院を思わせる。七六年に、旧制中学校校舎として全国初の重文指定を受けた。

設計者は、長い間外国人と憶測されてきたが、七四年に発見された棟札で駒杵さんとわかった。一八七七年山形県新庄市に生れ、東京帝国大建築科を出た茨城県技師。同中本館のほか旧太田中講堂などに腕を振るった。一九一九年、四二才で病没した。

幸子さんは駒杵さんの養子となった常作さんと三七年に結婚。が、常作さんは結婚三年で召集、戦死したため義父の仕事などを聞く機会はほとんどなかったという。

今回の訪問は、同校OBで東京都内の会社社長奥村好太郎さん（五七）が仲介した。駒杵さんのことを調べてい

た奥村さんは、新庄市などにあたり、幸子さんの存在を知り「一度訪問してみたら」と呼び掛けた。

幸子さんと、幸子さんの実家の姓を名乗る長男の妻、川越順子さん（五一）は午後二時過ぎ、学校に到着、同校の今宮直彦教諭らに本館を案内された。二人は本館外装や中の資料展示室を熱心に見学、特に「大棟梁駒杵勤治」の棟札の前で感慨深げにたがずんだ。義父母の顔を一度も見たことがなかったという幸子さんは、義父母の写真の載った資料に、「どんな人かわからなかったので、本当にうれしい。来たかいがありました」と喜んだ。順子さんも、「祖父が偉大な設計技師だったことがわかり、子供にも伝えることができそうです」と話していた。

編集後記

この四月には、わが母校に新しい後輩たちが入学してまいりました。

同窓会（東進会）まで二カ月足らずとなり、今回当番幹事の高校一〇回、二〇回卒業の方たちが中心となって企画しておりますので、楽しみにして下さい下さい。

皆さん一人でも多くの同窓生をお誘い合わせのうえ御出席して下さい。

会報は年一回発行の予定で考えております。紙面には数多くの会員の皆様様の声を反映していきたいと思っておりますので、事務局までご連絡下さい。

最後に六月一二日には皆さん元気な姿でお会いしましょう。